はじめて愛する

加藤日出男

根っこ文庫太陽社

じめて愛する

加藤日出男著

根っこ文庫太陽社

はじめて愛する

昭和三十八年七月一日　初版発行
昭和三十八年七月二十日　第二版発行

定価　二百三十円

著者　加藤日出男
発行者　境野照之助
発行所　根っこ文庫太陽社
東京都港区赤坂青山南町六の四三青山ビル

印刷表紙㈱　千代田グラビヤ印赤坂
〃　本文　三協美術印刷山南町六

・落丁・乱丁が万一ありましたらお買上げ店
発行所にてお取換えいたします。

Hideo Kato Printed in Japan

貧乏なるがゆえに幼い頃から
　我慢のしつづけだった
　　機械工の為男
そんな為男にも、淡い恋の川
　　が流れた
バンビのように明るい清楚(せいそ)な
　サッちゃんにも
　哀しい汚れた傷跡が
　　うずいていた
谷間の清水のように恋の水
はさらさらとは流れない

我慢(がまん)というオキテに負けて

為男はなにがなんでも進学しようと思っていた。

〈高校ぐらい出なけりゃ話にならねえ〉

といったって勉強ずきというほどのこともなかったが、なにがなんでも高校だけはいっておきたかった。それというのも為男は機械好きで、どうせやるなら工業高校の機械科だときめていたからだ。

そのため、中学にあがってからもずっと新聞配達をつづけて、家計を助けてきた。

だが、雪も消えかかる頃になると、とうちゃんもかあちゃんも、高校進学のことはピタリといわなくなってしまい、それとなくいいかけると、

「なにも学校だけが道じゃねえからな」

と、話をそらしてしまう。

だいぶ話がくいちがってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

新聞配達をはじめた頃は、
「おめえにまで稼がしてすまねえな。この金には手をつけずに、おめえが高校さゆくときのたしに使わしてもらうべ」
とうちゃんは、たしかにそういったはずなのに。
とうとう入学試験の日どりが発表された。担任の先生からも、
「為男はどうするんだ。工業高校さ受けるのとちがうのか」
とさいそくをうける。
為男は、思いきってとうちゃんとかあちゃを前にいった。
「おらあ、受けるだよ、工業高校さ」
すると、かあちゃんが、黙りこくって、うつむいてしまったとうちゃんにかわっていった。
「兄ちゃんがよお、病気にさえならなかったらな……。がまんしてくれ。今年いっぱい働いてくれ為男」
〈そうか、やっぱりそうか。それが本音だったんか。なんで黙ってたんだ。いまのい

まになってよお。三年間、おらあ、じっとがまんして新聞、くばってきたんだに〉為男は、忿懣やるかたなかった。

今年一年進学を待てという。もう一年がまんして働けという。だが考えてみれば、この我慢というオキテにどれほどしばられてきたことか。

為男は生れたときから我慢という轡をはめられどうしできたではないか。ちっちゃいときから、どんなに我慢のしどうしだったことかわかりゃしない。

ほかの子たちがみんなもっている鞄だって買ってもらえなかったし、修学旅行にだってゆけなかった。もちろんそれは両親のせいばかりでないことは、よくわかっている。社会が悪いから、政治が悪いからといえばそれまでだが、どうしてこれほど、かあちゃんも、とうちゃんも、おらあまで働いてもよ、貧乏なんだい。いつまでまてば、おれたちの我慢という轡ははずしてもらえるんだい。

弟たちがみんな犠牲になって、兄ちゃんは商業高校を出た。たべるものもたべないで——ほんとに兄ちゃんが商業学校出るために、みんなはそうだったじゃないか。やっと学校出て会社勤めが出来たと思ったら病気だときた。どうしてこうも、ツキが悪

いのだろう。

いま、おれが我慢というオキテにそむけば、我が家のちっぽけな舟は激浪にひとのみにされてしまうというのだ。なんという残酷な話だ。

とうちゃんは何もいってくれない。

＜じゃ、これまで稼いだ、あの金はどうしたというのだ。あれほど進学のときに役立てようといっていたあの金は！＞

＜貧乏という小舟にいっしょに乗っているから共同責任だというのだろう。それはわかる。だが、船頭がピンチにきて、なにも云わぬというのはどうしたものだ。おれのかせいだ金をどう使ったのか、いってもらおうじゃないか＞

煮えかえるはらをおさえかねて、為男はわなわなとふるえた。

とうちゃんは、次第に下を向き、ひたいと畳の距離をちぢめてゆくばかりだった。そしてものをいうかわりに、しゅんとときおり鼻汁をすすりあげ、ムシロのような肌をした手で顔をなでるだけだった。

いろりの火がちろちろと燃えゆらぐ。弟たちが、土間にむしろをしいて縄をなって

いる。三人の弟たちは、明日の我が身にふりかかる重大な場面を、横目づかいにちらちらいろりの方をみている。三人ともなにもいわない時間がたっていった。古ぼけた旧式の柱時計の振子が、虚しく物悲しくなっている。ときどき景気よく、ぱちっぱちっと焚火が、はねる。

為男は我慢というオキテに負けた。

為男は突然、すっくと立ちあがった。そして藁靴をつっかけると、弟たちのなった縄を蹴ちらすように、表に出ると、解けはじめた雪道を、あてどなく駈けていった。

いろりのふちで、かあちゃんの泣きくずれる姿が、為男の反抗をやわらげていった。

為男は母想いの少年だった。

いい娘だぞう、彼女

一年という歳月は過ぎてみれば短いものであった。

為男は東京の下町にある自動車の部品工場で働いている。

彼は定時制に通いはじめたのだが、結局つづかないで半年ちかくでやめてしまった。

残業の多いこの工場で、定時制に通学するのは、はじめからどだい無理であった。給料も残業で稼げといわんばかりの薄給で、残業なしだと食費や税金を引かれて手取りはわずかに六千円ぐらい。だから残業で稼がねばならない。

為男は毎月平均残業百時間でせいぜい五千円ぐらいふえるだけだった。

為男は仕事はきらいじゃなかった。だがバラックの飯場のような寮の雰囲気にとけこめなかった。中学を出たばかりだというのに煙草を吸うものもいたし、バーにゆくものもいる。これが一年まえまで中学生だったとは、どうしても思えないほど、生活はすさんでいた。

為男は彼らのなかでは、いちばんつきあいの悪い奴で通っていた。為男は、もうひとりつきあいのわるい札つきの先輩、義夫といっしょにある日寮を出た。歩いて工場まで二十分たらずのところに四畳半のアパートを借りて自炊生活をはじめた。

はじめはいきおいこんで電気釜まで買ってやってみたが、残業つづきの若い労働者

には、お勝手仕事は、ハンマーをにぎるよりよっぽどつらい。メシは出来たがおかずがないという朝もある。

ときには、なかなか見事な料理を作るが、時間切れで、半分たべて、あとは、工場までの駈け足の途中に飲みこむといったあわただしさである。

だが、あの連中とわかれて暮せると思うと天国であった。天国の家賃は一ヵ月五千円ナリである。為男と義夫はワリカンでそれをまかなっていた。

二人はおんぼろのアパートではあったが、大いに天国のありがたさを味っていた。日曜日は、一日中ぐうぐう眠る日が多かった。五千円も払っている天国であれば、せめて眠ることだけでも大いに満喫せねばならない。

為男たちの朝は次第に電気釜のお世話にならないでもすむようになっていた。メシを作るとその分だけ時間をとられる。そこで、パン食に切りかえた。

東北で育った二人は、パンでは忍耐力をそこねられる。すぐ腹がへるからだ。東北人はねばり強いというが、パンではそのねばりも湧いてこない。だが、それもじきに馴れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

アパートのある横丁を出るとつきあたりにラビット屋というパン屋がある。ラビット屋は大変早起きで、牛乳屋や豆腐屋なみの早朝営業である。

ラビット屋にまた一組おなじみさんができた。為男と義夫たちである。二人は一日おきに、交代で朝ラビット屋におつかいに出かける。

このおなじみさんの注文は、これまたおなじみの品である。

「コッペ四コ」

といいかけると、

歌代ちゃんという茶目っぽい店員が、

「はい、まいどありい！　そのうちわけは……」

といいかけて、ヨネちゃんというこれまたおきゃんな女の子にバトンタッチ、

「はいそのうちわけは、バターにジャムそれぞれ二コずつ」

すると、また歌代ちゃんが、

「おまけに牛乳が二本」

というと、

「はい、それまでよ」
とヨネちゃんがいう。
二人は為男たちのやってくるのを結構たのしみにしているらしい。
ある朝、為男の眼にラビット屋に住みこんだ新顔の少女の姿がとびこんできた。おさげ髪のはしに、蝶むすびの小さなリボンがついている。どちらかといえば肌の黒い健康そうな女の子だった。
「ねえ、為さん、こんど新しく入ったの。可愛いがってね」
ヨネちゃんがいいかけると、
「サッちゃんっていうの。どうぞよろしゅう、おねがいつかまつり候」
と、歌代ちゃんが歌舞伎の襲名披露の口上の調子でその子を紹介した。
サッちゃんは、細おもての健康そうな肌に、恥じらいの色をうかべて、ぱちぱちとながいまつげをうごかしただけだった。
為男は、義夫とコッペをむしゃぶりつきながら、ラビット屋の新顔さんのことを思い浮べていた。

「あの子、驚いたろうなあ」
「誰だいあの子って」
「あの子だよ」
「だからさ……」
義夫は、つまらなそうに詰問(きつもん)した。
為男は、ひとりだけで想っていたかった。パンの味が、よけいにおいしくなるからだ。
「口に出しちゃ味がなくなるよ」
「おい為さん、いつからおまえさんは、そんなエゴイストになっちまったんだい」
「いつからって、たったさっき……。でもよ、義ちゃんだって、あの子をみたら、ぷーんとなんともいえない春の若芽のような匂いを想い出すだろうよ」
「えーい！　勝手にしあがれ」
「サッちゃんってんだ。ラビット屋の新顔さ」
「そんなにいい子かい」

「うん……とっても」
「歌代ちゃん並みかい」
「くらべもんにならん」
そういってから為男はしまったと思った。義夫は歌代ちゃんびいきだったから。
「ちえっ、そんなにいい子かい」
義夫は充分、関心を示した。
翌朝、義夫に為男はきいた。
「よかったろ、あの子」
「ちえっ、笑わすなよ。焼きすぎたパンみてえじゃないかよ。さしずめこげパンというとこかな。ひょろひょろっとしていてさ、まだ子供じゃねえかよ」
「おれたちだってさ、子供じゃねえかよ」
「あの子はとくべつだよ」
「そうかなあ……」
為男は、大事にして育てている子鹿を足蹴にされたようで、無性に腹がたった。そ

うだ、そういえば、あの子はバンビそっくり、あの眼、あの脚、あの髪。為男は走り寄っていって、子鹿のからだをつよく抱きしめてやりたかった。

その日以来、サッちゃんのことが為男の頭を占領していった。瞼をとじるとすぐにサッちゃんのことが浮んでくる。

為男はいままでかあちゃん以外の女の人の面影を胸に抱いたことがなかった。

だが、不思議に為男は、歩いていても仕事中でも寝てからでも、茶色な肌の、ほっそりとした顔のサッちゃんのことばかり想い出されて、もう何日か、かあちゃんのことを忘れてしまっていた。

エプロンにしみた好意のしるし

昼休みだった。

広場のない工場では、陽当りのいい空地に、三三五五たむろしておしゃべりをしているうちに休憩の一時間が過ぎてしまう。

為男と義夫は道路のはしで、キャッチボールをしていた。
義夫の投げたボールが大変な大悪投で、たまは塀にあたってから、横丁の坂道をごろごろところがっていった。
為男は、猫がまりにじゃれるように、白いボールを追って、たまといっしょに坂道を駈けおりていった。たまは足が早くて次第に為男をひきはなした。為男は義夫を恨んだ。
そのとき、前方で、キューッとブレーキをかけて自転車が停って、
「はい」
と、ボールを渡してくれた少女がいた。なんとそれはラビット屋のバンビではないか。
為男の心に、とつぜんジェットエンジンがかかった。ボルテージがあがって為男は言葉を失った。
少女は太陽のような微笑みを浮べていた。おさげが風にゆれて、少女の美しさは、為男にとって、ほかにくらべるもののないほど魅力にあふれてみえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton